

参加者：小学校教師 3 名、中学校教師 2 名、大学教員 2 名

内容：日本哲学会で発表する予定の出席者が学会用に編集した授業のビデオを見て議論

中学校 3 年生が国語の授業で森鷗外の『高瀬舟』を読んで立てた問い「知人が自ら死を選ぶとしたら自分はどうするべきか」を巡る対話を、学会用に 15 分に編集したビデオを見て、議論した。議論の後、発表者からは 2 回の授業の記録を再度検討してもらって、参加者の意見をもらいたいとなった。

以下は、その記録を読み、3 月 23 日の議論を受けての報告である。

ビデオ

1 回目

単純に、出席者からは、学会が哲学の専門家を相手にしているのであれば、この 15 分間のビデオをどう理解してもらえるか、かなり微妙ではないかという指摘があった。

発表者がどうしてこのような形でビデオを編集したのか、それはなかなか理解しにくい。

発表者が授業をすごいと思って、一定の意図をもってビデオを編集したのだが、そのすごいという思いはビデオを見ただけでは伝わらない。

授業の展開は、それほどの印象を与えないのではないか。しかし、実際は経験者としてこのような形で子どもが発言していく授業を展開するのは、かなり難しく、経験を積まなければできない。このこと自身が理解されないのではないか。

取りあえずは、このようなテーマで生徒はどのような形で発言したかがテーマになった。

司会者はボールを自分の隣の生徒に渡す。生徒は順番に自分の意見を述べていく。手を挙げて自分の意見を語るという形にはなっていない。テーマが或る意味重いので、自分から手を挙げて意見を言うということが難しい様子。

最初は、ボールを受け取った生徒もすぐには自分の意見を言えない様子。「何で俺？」という反応。

次第に自分の意見を述べるようになっていく。

知人というのは親しくしている友だちだとして、その友だちから死にたいと言われたら、真剣に受け止めてやる。本当に死にたいということであれば、またそれが不可避であれば、それを理解してあげる。

友だちからそのようなことを言われれば、自分に責任、負い目を感じる。

自分が死にたいと思った時は、他の人に迷惑をかけるかのうせいがあるから（高瀬舟でも結

局そうなった)、やはり誰かと相談する。

議論という展開になっていく。

途中から、友だちの発言を聞いて、それに対する質問を出す生徒が出る。そこから議論は、それぞれ生徒が手を挙げて、自分の家族や友人との関係に基づく自分の経験に即して、自分の思いを語って行くことになる。最初はボールをすぐに隣の生徒に渡していた子も、手を挙げて、発言をし始める。そして、議論は自殺と人生の目的との関係という議論になっていく。生徒の家族の具体的な状況が話題になり、生きる希望ということが話題になっていく。また、今は生きる目的が分らないとしても、死を目前としたら分るのではないかという意見が出て、これに対する共感もあった。しかし、病気で死を目前にし、見舞いの人もなく、話すことも見ることもできない状況で、死んでいるのと変わらないような状況であれば、死にたいと思うのではないか、という反論。特に C は様々な状況を考慮するようになりつつも、やはり苦しんでいる人は死を選ぶのではないかということに固執している様子が見える。

2 回目

ボールは参加者に順番に回されていくが、1 回目と違い、各自が自分の意見を述べるようになっていく。これは、1 回目の授業を聞いていたということから起きた現象である。今回は 1 回目よりもむしろ議論ということにはならなかったが、ボールを受け取った生徒が、その前の発言を受けて、自分の考えを深めていくという展開になってきている。手を挙げて、ボールを受け取って自分の意見を述べるというよりも、ボールが回ってくることを意識しながら、前の発言の内容を自分なりに理解して、発言している。通常、ボールを隣の人に回していくのは、意見が余りでなかったり、発言者が偏ったりする場合に行うスキルの一つであるが、ボールを隣に回していくことの別の効果がここで展開されている。

2 回目は、それぞれが周りに自殺者がでたということを巡って展開していく。そして、人は目的があれば生きていくのではないかという議論から、他者の理解があることが生きることによって重要であるという展開になっていく。それは、自殺者が誰にもそのことを語らずに自殺した場合、残された友人や家族さらには自分の思いを反省するところから出て来た。

輪の最後にボールを受け取った生徒は、自分を理解してくれる他者がいないという状況の中で人は自殺をするとすると、そのような状態を理解しつつ、君の言うことは理解できる、だから自殺してもいいよと言うとすれば、自殺しようとする者は理解されていることになるから、自殺しないということになるし、それとは逆に、それでも自殺は止めなさいと言われるれば、やはり自殺しようとする者は自分が理解されていないと考えて自殺してしまうのではないか。これは何か矛盾した状態ではないか、という意見が最後に出される。

この意見に対して、自殺する理由は周りから理解されていないということだけではないのではないか、自殺しようとする人がそのことを他の人に語るということは、その時点で、理

解してくれている人がいないとか、自分の存在が認められていないということではなくるので、それでも自殺するという事は、その人が思い違いをしているのではないか、という反論が出る。

司会者は、教師も含めたこれらの意見を受けて、自分の小さな経験を語るという形で、例えば、転んでけがをしたようなとき、母親は笑ってすます。これは馬鹿にされているみたいで、結構心が傷つく状況であって、そのことを母親に言うと、母親は私に、笑われた方が楽でしょう、というような答えをした。このような状況は、何か今までの話に通じるのかなと感じた、という形で議論は終わる。

この議論に参加した教師としては、生徒たちにとって、「死」は案外身近なのではないかという印象を持った。実際、議論の後、一人の生徒が話をすることで救われたということを書いてきた。普段、自分で死や自殺のことを考えてはいるが、それをどう受け止めていいかわからない状況があって、それで、皆と話し、皆の意見を聞いているうちに、自分の考えにある意味でのまとまりができたのであろうか。これは、大学生のグループで自殺がテーマになり、実際その議論に参加していた一人が、後で自殺したというケースとは逆ではあるが。

子どもたちは、学校では、ある意味で、強制的に一つのクラスに閉じ込められ、そこには自分の意思は全く関与していないという状況が存在する。このような中で、様々な背景を持った子どもたちが交わり、関係を持って行かざるを得ない。このような背景のもとでの P4C の議論の意味を、つまり **Philosophy for children in school** の意味をどのように積極的に受け止めることができるのか、これは、一般の哲学の議論とは全く違う。P4C in school の場合には、どうしても、子どもたちの発言や議論の論理的展開以上に、子どもたちの関係を配慮した、解釈学的な理解が必要である。